

# 龍 滿城跡

2000. 3

香川県香川郡香川町教育委員会

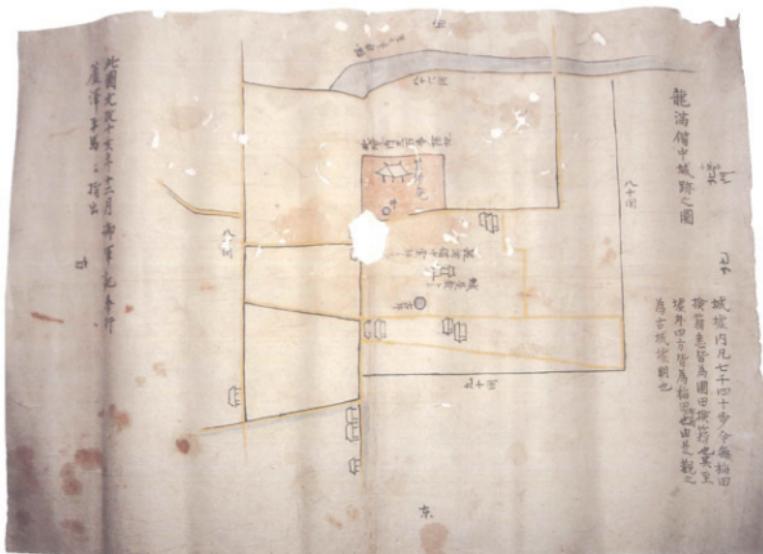
題 字……香川町教育委員会教育長 中 原 弘

# 龍滿城跡

2000. 3

香川県香川郡香川町教育委員会

卷頭圖版



龍滿城跡繪圖

## 序文

この報告書は、平成11年度の龍満西水路改修工事に伴い、平成11年11月8日から同年12月22日にかけて実施した龍満城跡発掘調査の記録です。

香川町内には、中央部より北東部にかけての丘陵部に、万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳・横岡山古墳などがあるが今のところ古代の遺跡は発見されていません。

中世になってから有力な武家の城館があちこちに造られたと思われます。香東川流域の平野部には、北から大野北城・大野南城・龍満城・乾城・箭造城などが点在し、今回はその1つである龍満城の一部を発掘調査しました。

龍満城は、愛知県三河出身の二川氏が、当時讃岐の守護となった細川頼之に従って入国し、現在の「立満」の地に館として造ったものであり、後に二川氏は「龍満」を名乗ることとなつたようです。

今回の調査で、水路自体は明治時代以降の比較的新しいものと思われるが、水路を形成している側面の土堀下部の土壙と思われるものが、龍満城築城に伴う可能性が高いものと思われました。

また、今回の調査場所の北側に祀られている薬師庵とのかかわりが、今後の調査研究の手掛かりとして重要な要素になると想われます。

このささやかな報告書が、この地域の文化財解明の手掛かりとなり、先人の生活に思いを馳せるきっかけとなることを念じています。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、献身的にご協力いただいた関係機関、関係者の皆さんをはじめ、直接多くなご指導をいただいた香川県教育委員会事務局文化行政課文化財専門員の森 格也氏に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

香川町教育委員会

教育長 中原 弘

## 例　　書

1. 本書は、龍滴西水路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県香川郡善通寺市大字田東下字西立満に所在する龍滴城跡の調査報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川町教育委員会が香川県教育委員会事務局文化行政課の指導及び協力のもと実施した。
3. 調査期間は、平成11年11月8日～平成11年12月22日までの実働26日間である。

4. 調査から本報告書作成に至るまで、下記の機関及び方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)

香川県教育委員会　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　香川町南部土地改良区  
梅香井水利組合　協和建設工業株式会社　香川町建設課  
杉山熊雄　眞鍋福雄　石原好太郎　龍満勝美  
影山文雄(香川町南部土地改良区理事長)　吉田正行(梅香井水利組合長)

5. 本報告書の執筆・編集は、香川県教育委員会事務局文化行政課文化財専門員 森 格也、香川町教育委員会社会教育課 向井敏伸が担当した。執筆分担は下記のとおりである。  
第2章、第3章、第4章・・森  
第1章・・向井

6. 本書挿図中のレベル高は、すべて海拔高を表す。
7. 本書挿図中の方位は、磁北を表す。
8. 本書挿図の一部に国土地理院発行2万5千分の1地形図(「高松南部」「川東」)を使用した。
9. 卷頭カラー図版に用いた絵図は、龍満勝美氏所蔵のものを同氏の許可を得て撮影・掲載したものである。
10. 発掘調査で得られたすべての資料は、香川町教育委員会で保管している。

## 三 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	5
第1節 調査区の概要と基本層序	5
第2節 道構	6
第3節 遺物	11
第4章 まとめ	11

## 挿 図 目 次

第1図	香川町位置図
第2図	周辺遺跡分布図
第3図	基本土層柱状図
第4図	調査区位置図
第5図	遺構配置図
第6図	石垣断面図
第7図	出土遺物①
第8図	出土遺物②
第9図	出土遺物③
第10図	出土遺物④
第11図	龍満城復元図

## 図 版 目 次

図版1	調査地造景（南から）、調査前（南東から）
図版2	土壌部分（南から）、石垣検出状況（東から）
図版3	石垣検出状況（西から）、石垣正面（南から）
図版4	石垣断面A—A'（東から）、石垣断面B—B'（東から）
図版5	完掘状況（東から）、石垣立面実測風景（西から）
図版6～図版9	出土遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 龍城に至る縦縛

平成11年6月、香川町南部土地改良区より龍城跡において平成11年度土地改良県費補助事業の龍溝西水路改修工事を実施するにあたり、埋蔵文化財の問い合わせが香川町教育委員会に対応してあった。

同地は、「龍城跡」として知られる周知の埋蔵文化財包蔵地にあたるため、平成11年7月から10月にかけて香川町南部土地改良区・地元梅香井水利組合・土地所有者・町建設課などと協議を重ねた結果、水路改修工事部分の57.6m<sup>2</sup>を調査対象とし、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導のもと工事着手前に発掘調査を行うこととした。



## 第2節 調査の経過

現地での発掘調査は、平成11年11月8日より開始した。調査は、まず周辺地形の測量から行った。

次に、水路改修工事場所に既存する水路に隣接して石垣があつたが、この石垣は土壘状の遺構に伴い構築され龍城間に関連する可能性があるとの、水路改修工事により影響を受けるため、調査の必要が出てきた。このため石垣及び現存する土壁の実測を行った。

その後、11月30日からは、石垣の土壁部分等の除去作業を行い、石垣上面部分の検出作業を経て、同所の実測を行った。

12月16日からは、石垣部分の2ヶ所を立刺し断面図を作成し、12月20日から石垣を除去し水路部分の遺構検出に努め、土層図等を作成して12月22日に現地での発掘調査を終了した。

なお、調査の詳細は、次の調査日誌（抄）のとおりである。

### 調査日誌（抄）…実働26日間

平成11年11月8日（晴）	調査開始。平板図作成。
11月11日（晴）	基準高設置。水路北側石垣土壁立面図作成に伴う実測用割付。 水路北側石垣土壁立面図作成。
11月13日（晴）	水路北側石垣土壁立面図作成。
11月14日（晴）	タ
11月16日（曇）	タ
11月17日（曇）	タ
11月18日（曇）	タ
11月19日（晴）	タ

11月22日（晴）	タ
11月24日（曇）	水路北側石垣土塗部分写真撮影。
11月30日（水）	水路北側石垣の土塗部分等の除去作業。
	水路北側・南側石垣上面検出作業。
12月1日（水）	水路北側・南側石垣上面検出作業。
12月2日（木）	水路北側・南側石垣上面写真撮影。
	水路北側・南側石垣上面平面図作成に伴う実測用割付。
12月3日（金）	水路北側・南側石垣上面平面図作成。
12月4日（土）	タ
12月6日（月）	タ
12月7日（火）	タ
12月8日（水）	タ
12月13日（月）	水路南側石垣立面図作成に伴う実測用割付。 水路南側石垣立面図作成。
12月14日（火）	水路南側石垣立面図作成。
12月15日（水）	タ
12月16日（木）	水路北側・南側石垣断面立割（南北方向2ヶ所）。 石垣断面立割部分写真撮影。
12月17日（金）	石垣断面立割部分断面図作成に伴う実測用割付。 石垣立割部分2ヶ所断面図作成。
12月20日（月）	石垣・水路部分除去作業。積雪・ひどく寒い。
12月21日（火）	石垣・水路部分除去作業。水路部分遺構検出作業。 調査区全景写真撮影。平面図作成。
12月22日（水）	水路北側部分土塗図作成。調査区位置図作成。 調査区の埋め戻し作業等を行い、調査終了。

以上、現地での発掘調査終了後、平成12年1月から報告書作成に必要な整理作業を香川町教育委員会事務局社会教育課で随時行った。

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

香川町は香川県のほぼ中央部に位置し、町の西端部分には香東川が南北方向に流れている。香川町の南部は阿讃山脈から連なる丘陵地帯となっている。この山間部を縫うように流れてきた香東川は、高松空港付近で丘陵地帯が切れる部分から扇状地図の沖積平野を形成しながら北流し、瀬戸内海へと注ぎ込んでいる。この高松平野の南端部分に香川町は位置していることになる。

龍満城跡は香川町の中央部分の、香東川の東岸部分の沖積地に位置し、標高は72.5m前後である。また城跡の東側には龍満山から派生する標高120m前後の独立丘陵が迫っている。

### 第2節 歴史的環境

香川町内では今のところ、旧石器・縄文時代の遺跡や遺物は発見されていない。

弥生時代では明確な遺跡はまだ発見されていないが、船岡山や新池で石包丁や石織が採集されている。しかし香川町の平野部の南端部分で香南町に入った場所で、弥生時代後期の集落跡である岡清水遺跡があることからも、今後香川町内の平野部分でも弥生時代の遺跡が発見される可能性は高い。

古墳時代になると、双方中円墳の可能性もある船岡山古墳が築かれる。浅野小学校にこの船岡山古墳から出土したと考えられている剣抜式石棺がある。前期から中期にかけては他に船岡古墳が可能性がある以外は見あたらない。6世紀後半以降になると横穴式石室をもった古墳が多く築かれるようになる。香川町内の中央から北東部にかけての独立丘陵の裾部に、万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳（町指定史跡）・横岡山古墳（町指定史跡）などが築かれている。

古代の香川町は旧香川郡に属し、町内の北半部は大野郷に、南半部は井原郷に比定されている。香川郡には秦氏が多く居住しており、平城京から出土した木簡にも記されている。しかし今のところ古代の遺跡は発見されていない。

中世になると香川町内でも有力武家の城館が築かれる。香東川流域の平野部には大野北城・大野南城・龍満城・乾城・箭造城が築かれている。また高松空港の南側の山間部には鳥屋城がある。香川町以外では、香東川西岸の平野部に由化城・行業城などがあり、南部の山間部には山城である音川城・東谷城などがある。今回、その一部を発掘調査した龍満城は愛知県の三河の出である二川氏が、讃岐の守護となつた細川頼之に従つて入国し、現在の「立満」の地に館として築いたものである。この後に二川氏は「龍満」を名乗ることとなる。この龍満城については江戸時代の文政年間に描かれた絵図が現在も残っており、大まかながら規模や構造を伺い知ることができる。

近世になると香川町も生駒氏を経て松平氏の高松藩に編入されることとなる。



1 龍満城跡	7 横岡山古墳	13 箭造城跡	19 岡館跡	25 神内城跡
2 万塚古墳	8 刹山古墳	14 中田井城跡	20 行業城跡	26 好広城跡
3 八王子古墳	9 油山古墳群	15 吉光城跡	21 三谷城跡	27 東谷城跡
4 船岡山古墳	10 大野北城跡	16 池内城跡	22 王佐山城跡	28 首川城跡
5 船岡古墳	11 大野南城跡	17 横井城跡	23 向井山城跡	29 鳥屋城跡
6 東赤坂古墳	12 乾城跡	18 由佐城跡	24 錐野城跡	30 岡満水遺跡

第2図 周辺遺跡分布図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査区の概要と基本層序

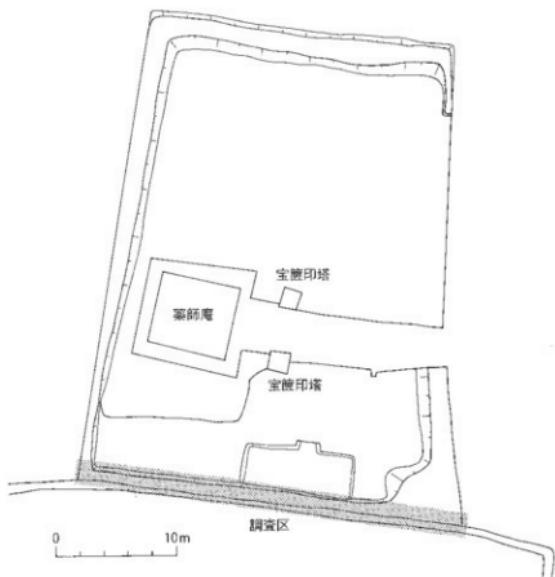
調査区は現在の薬師庵の南の土壌沿いに設定しており、南北1.8m、東西32.0mと東西に細長い調査区で、面積は57.6m<sup>2</sup>である。

調査区は遺構確認のため順次掘り下げたが、85cm下で砾を多く含む砂質土に至り、さらに10cmほど下げたが土質に変化が見られないため掘り下げをやめた。

調査区の基本土層は耕作土下から上から順に褐色砂礫土、灰褐色砂混じり粘質土、青灰色粘質土、茶褐色砂質土となっている。拳大の砾を含むことが多く、基本的に香東川の氾濫原にあたるものと考えられる。



第3図 基本土層柱状図（1／20）



第4図 調査区位置図（網掛け部分）（1／400）

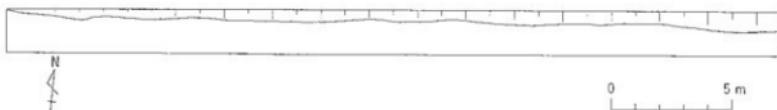
## 第2節 遺構

調査区の北側に現在の薬師庵の土塀が残っている。この薬師庵の本殿前に2基の京成御塚が残っており、文政10年（1828年）の銘が残されている。現在残っている上塀もこの当時のものの可能性が高く、また土塀の頂部には瓦が一部残っており、軒平瓦の瓦当文様から判断して江戸時代のものと考えられたので、土塀の立面図を作成した。

この土塀の下部には土壙と考えられる高まりと石垣状の石列（石をしっかりと組んで構築しているので、石垣と呼ぶ）が認められた。この石垣は薬師庵の上塀の基礎として造られたものか、薬師庵建立以前の龍満城に伴うものか当初は判断がつかなかった。従って土壙状との関係をつかむことも含めて、土塀を除去し石垣の全体の検出に努めた。

また、この石垣をそのまま利用する形で石組みの水路が作られている。この水路自体は明治時代以降のものと考えられるが、この江戸時代以前の石垣がどの部分までなのかも判断する必要もあった。

薬師庵の南東コーナー部分、すなわち調査区の東端部分で土壙が直角に北向きに屈曲している。この部分を境に東側の水路部分では石の並べ方や組み方が雑になるのと、薬師庵の他の部分の上塀の下にも石垣が見られることから、土壙が北向きに屈曲する部分までを江戸時代以前のものと判断した。

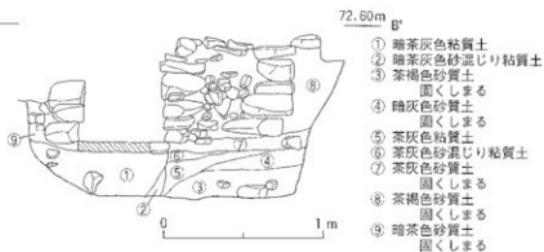
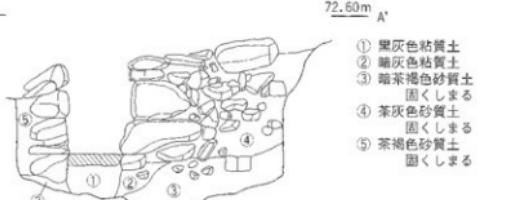


第5図 遺構配図 (1/200)

(a) 石垣

東西方向に31.1mで、南北方向にあたる奥行きは70~90cm、高さは60cmほどであるが、東に向かうほど部分的に70cmほどの場所がある。

一番下の基底部分には幅40~50cmほどの角礫を据えており、平坦な面を外側に向けている。そしてこの角礫の上にひと回り小さい30cm前後のものを積み上げている。そして石と石の間に拳大の石を入れて隙間を埋めている。最上部はやや扁平な石を乗せて全体の形を整えている。



第6図 石垣断面図 (1/30)

平面的にみると、奥行き方向（南北方向）の両端部に20~30cmほどの石で面を揃え、その間を拳入の石で充填している。

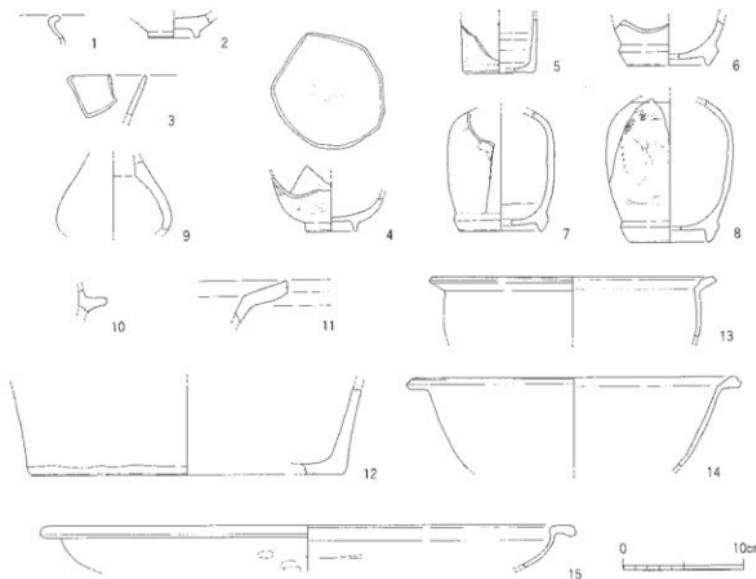
断面で観察すると、特に東側部分（B-B'）では両縁に石室状にそれぞれ外側に面を揃えて石を積み上げ、その間に拳入の石と土を入れて充填していることがわかる。西側部分（A-A'）では、裏側（北側）の石の積み上げは不明瞭であったが、外面（南側）の面を揃えて積み上げた大型の石の裏込めとして、拳入の石と土を入れて充填している。

#### (b) 土壘

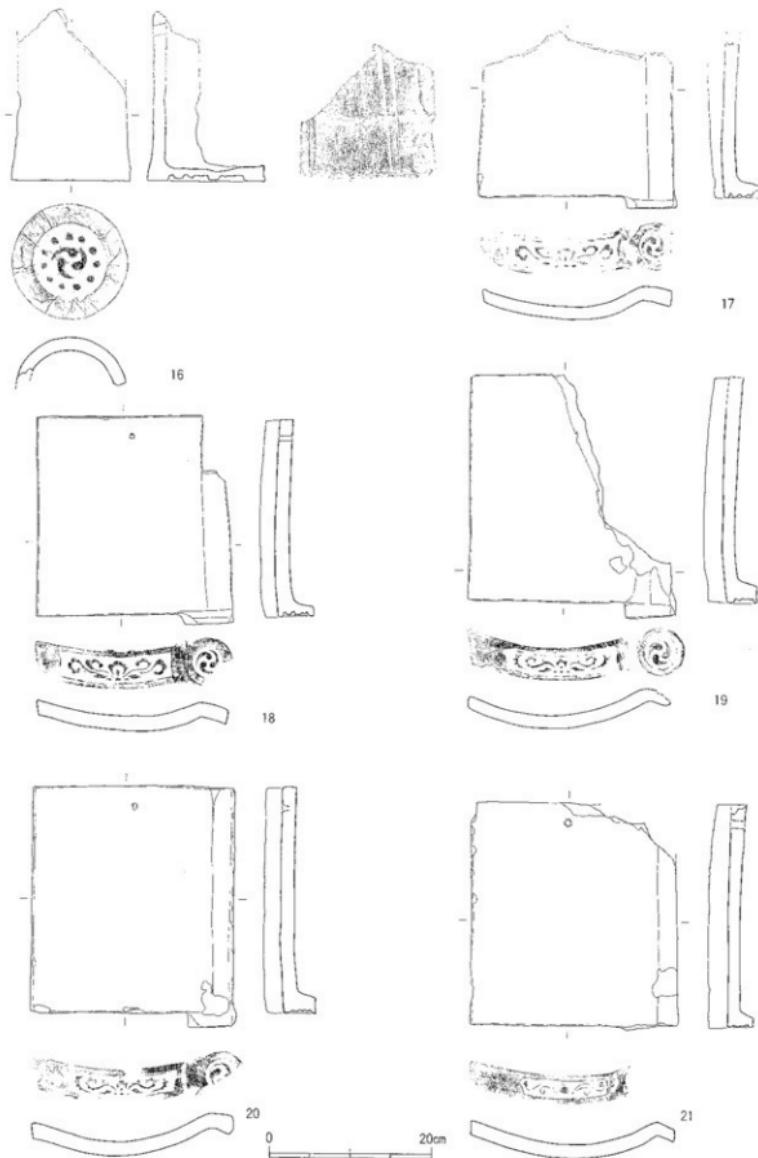
薬師庵の東側の一部を除いて土壘と考えられる高まりが現状で確認できた。北側の部分で上幅1.6~2.0m、下幅3.0~3.2m、上端と下端の比高差は30~40cm前後となっている。南東部分の屈曲部はS字状に屈曲して幅広で檻台のようになっている。今回はこの土壘と考えられるものは調査区外となり、直接の調査は及ばなかった。

しかし調査区内で石垣とその下部を立ち削ったところ、土壘の一部と考えられるものを検出した。A-A'部分の断面を見ると、石垣の下部で北側から南側に向かって傾斜する③層がある。この層は若干の拳入の礫を含む暗茶褐色砂質土で固くしまっている。B-B'部分でも同様に北側から南側に向かって傾斜する③・④層があり、やはり固くしまった砂質土である。

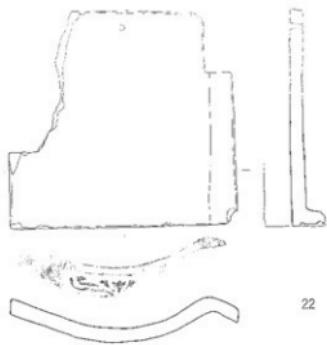
これらの土層は盛土で形成され、B-B'部分では版築状に固くなっている。さらにB-B'部分ではこの土壘と考えられる層の上に石垣を築くために平らに整地した固くしまる茶灰色砂質土層を検出した。このことからこの土壘は石垣構築以前のものと考えられる。この土壘の高さは復元で0.9~1.0mほどが考えられる。また幅は調査区の北側部分で削平を受けているため不明である。



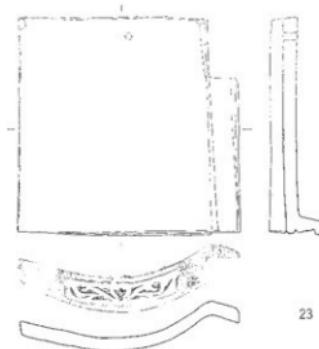
第7図 出土遺物① (1/4)



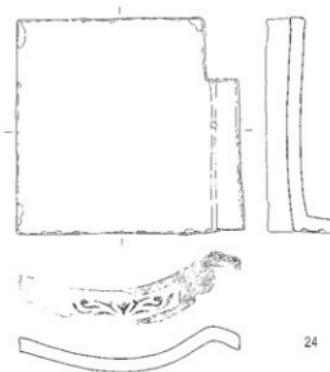
第8図 出土遺物② (1 / 6)



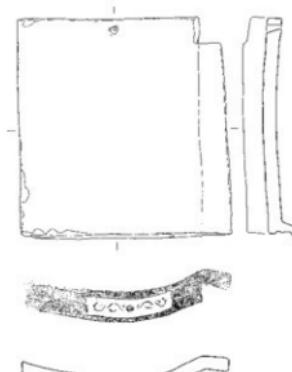
22



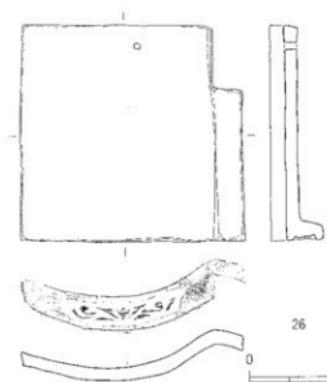
23



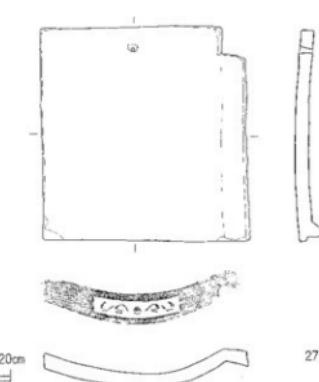
24



25



26

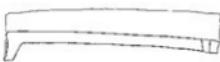


27

第9図 出土遺物③ (1 / 6)



28



29



30



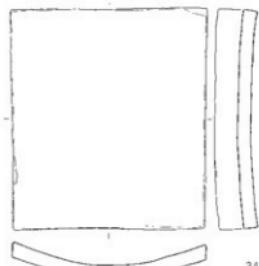
31



32



33



0 20cm

34

第10図 出土遺物① (1 / 6)

### 第3章 遺物

遺物は主に土器と石垣の中から出土した。陶磁器類、瓦質土器、土師器、瓦があり、量的には瓦が最も多く、コンテナで18箱分ある。

1は青磁の折縁皿である。口縁部は短く屈曲する。2は白磁碗の底部である。4は染付碗で体部は深く湾曲し、内・外面に文様が施されている。6～8は高台付きの徳利で、高台はいずれも厚手で外側に踏ん張る形となっている。9は瀬戸美濃製の徳利で、全体に黒褐色の鉄釉がかかっている。10は瓦質の土鍋の鍔の部分である。11は土師質の土鍋の口縁部、12は土師質の大甕の底部である。13・14は瓦質の鍋で、口縁部は短く厚手となっている。15は瓦質の焰口で、口縁部は厚く直横に開き、体部は浅く薄手である。

16は軒丸瓦で、瓦当面は薄く文様は右方向の三巴文で、その周りに11個の殊文が巡る。丸瓦部には釘穴がある。

17～21は軒棟瓦で、軒平部分の文様は均整唐草文で唐草の反転は大きくなっている。軒丸部分は右方向の三巴文で、軒平部分より前方に突出している。18・20・21は端部中央部分に釘穴が認められる。

22～30は軒平瓦である。瓦当面は外区部分が広くなっている。いずれも均整唐草文で、25・27・29の中心飾りは小さい。右側縁部は組みやすいように鍵の手状になっている。

31～33は丸瓦で玉縁式である。いわゆるコビキB技法によるもので、凹面にはゴザ目と板状工具の側面部による叩き目が見られる。

## 第4章 まとめ

小規模な発掘調査であったが、初めての「龍満城跡」の本格的な調査であった。調査の結果、現在も残る薬師庵の土壁の下にある石垣は、出土遺物から江戸時代末期（19世紀前半）に構築されたものであることが判明した。さらにこの石垣を造る以前には土塁が巡っていたことも判明した。

龍満城は三河二川荘（愛知県豊橋市二川町）の出身である二川四郎左衛門光吉が、阿波守護であった細川頼之（延文4年（1359年）から讃岐守護を兼ねる）の讃岐国進出に伴って入封して築城したものである。細川頼之が細川清氏を「白峯合戦」において討った後に、光吉は井原莊の龍満の地に土地を受け築城し、二川氏はこれ以降「龍満」と名乗るようになる。

この龍満城の規模は、現在も龍満家に残されている「龍満備中城跡の図」（文政10年作成）によると東西80間（約145m）、南北90間（約164m）で、西側には堀が描かれている。

これに対し、平地城館の復元は地籍図や空中写真などを用いた歴史地理的な方法を用いることが多い。明治24年の香川郡川東村の地籍図（公団）から復元した龍満城が第11図で、網掛けの部分が堀と考えられる部分である。この堀の跡は昭和30年代の空中写真でも判読できる。これによると東西156m、南北170mで、堀の幅は南側部分で18m、東側部分で20mである。堀の内側は東西102m、南北124mでこの部分に龍満氏の館が築かれていたことになる。この堀の内側の網掛け部分が今回の調査区である。通常、土塁は堀の内側に隣接して築かれるため、今回の調査で検出した土塁は龍満城に伴うものとは考えにくい側面があるが、図を見ると今回の調査区の西側に直交して細長い区画が残っており、小さな堀の可能性がある。つまり館の内部にも小さな堀を設け、その内側に土塁を築いて中心となる建物部分を防御したとも考えられるが、現段階ではその可能性を指摘するにとどめておきたい。また、建物配置や付属施



第11図 龍満城復元図 (1/6000)

○宅地 V細地

設も今のところ不明である。

龍満城がいつ廃城となったかは不明である。しかし龍満城中守先森は、天文22年（1553年）に毛利長慶・秀賢が阿波勝瑞城の堀川陣を攻め落とした際に、堀川側で戦ったが戦死する。この直後に廃城となった可能性が高いが、堀の跡を調査すればこの城の存続期間が判明し、龍満城として機能していた期間もつかめよう。調査区のすぐ東側部分で「城屋敷」、推定北側城の一帯に「北門」という地名が現在でも残っている。

龍満城の廃城後に薬師庵が建立されている。建立時期は不明であるが、「龍満僧中城跡の図」には薬師庵が描かれているので、文政年間以前の建立である。山城の場合でもその城が築かれた山の麓に寺社が建立されていることが多い。平地城館でも寺社と重なっていることが多い。これは城館の築かれた土地が廃城後も神聖な場として、あるいはその地域を治めた領主・武士の住んだ特別な場として考えられているのかもしれない。城館の跡地が開墾され水田化せず畠地あるいは荒地として残ることが多いのもその一因かも知れない。

今回、龍満城跡の一部を調査したが、考古学の成果あるいは発掘調査が無理であるなら現地表面観察による繩張り調査・測量調査、歴史地理学の活用、軍記物や戦記物によらない一級文献史料の分析により、龍満城跡を含めた中世城館跡の研究が一層進むものと考えられる。



調査地遠景（南から）

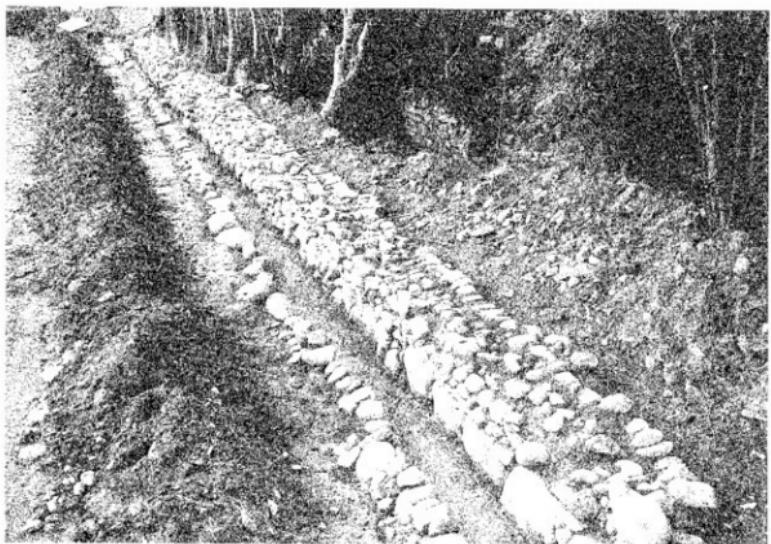


調査前（南東から）

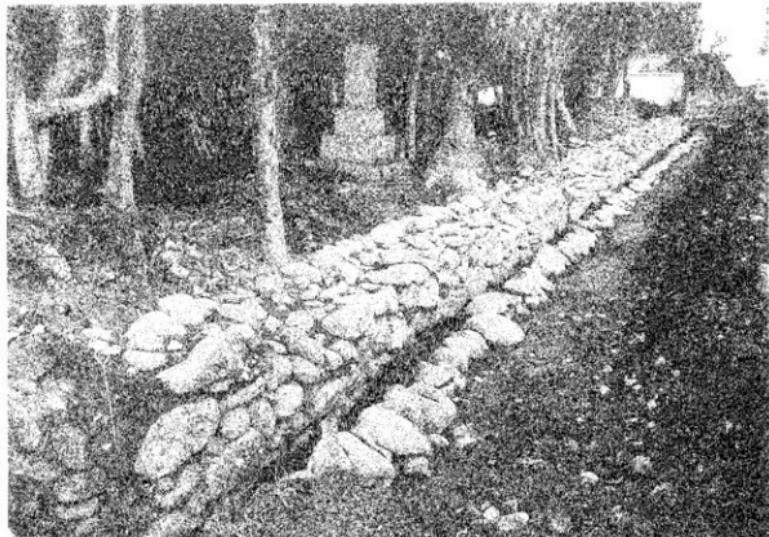
図版 2



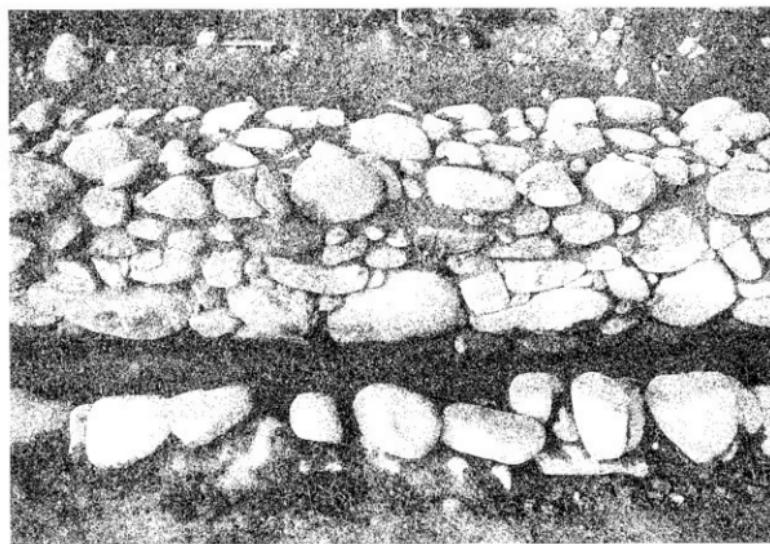
土壙部分（南から）



石壙検出状況（東から）



石垣検出状況（西から）

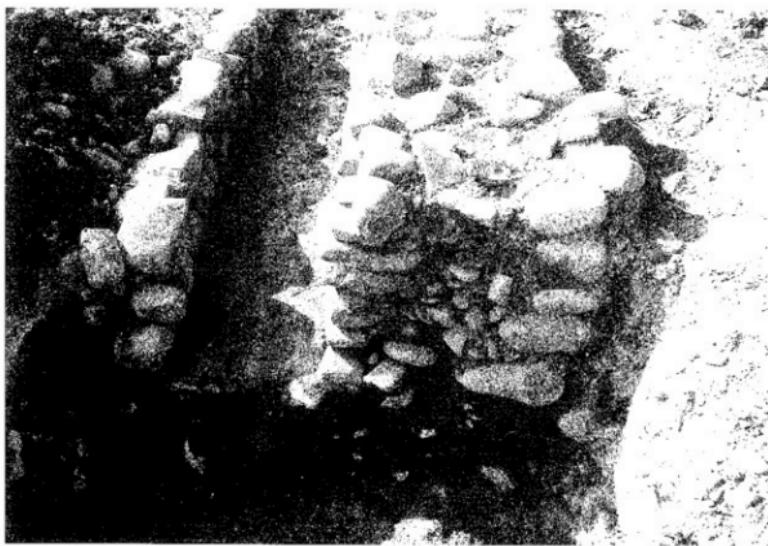


石垣正面（南から）

圖版 4



石垣断面A—A'（東から）



石垣断面B—B'（東から）

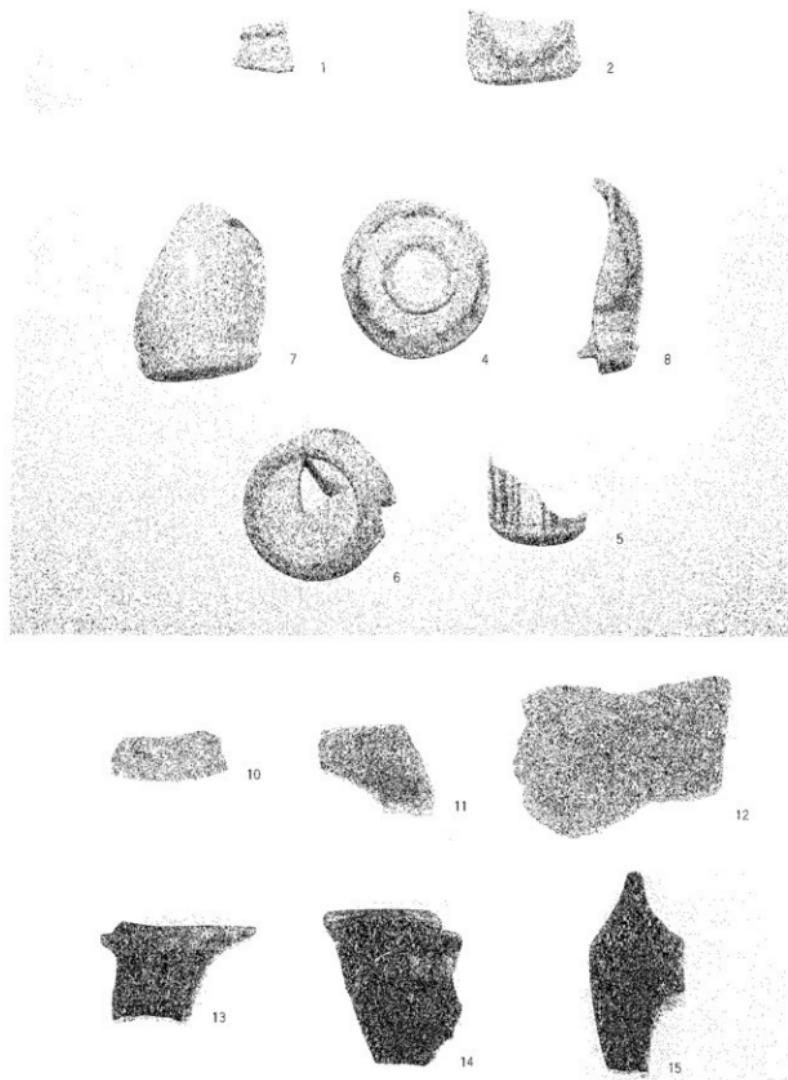


完掘状況（東から）



石垣立面実測風景（西から）

圖版 6



出土遺物 (1)



17



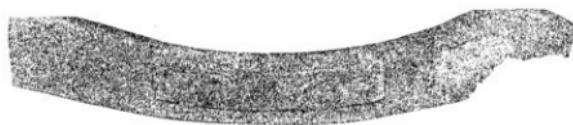
18



19



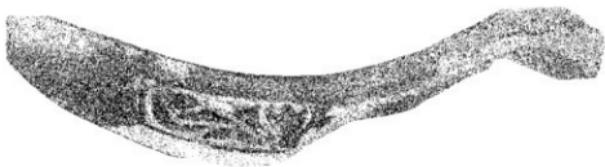
20



21

出土遺物 (2)

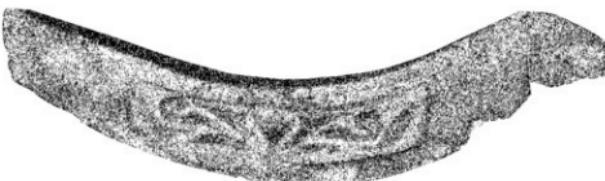
圖版 3



22



23



24

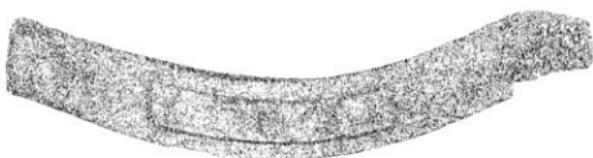


25



26

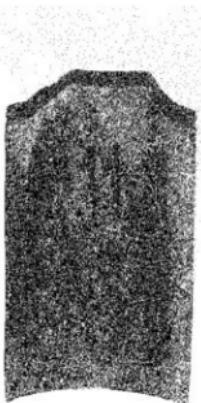
出土遺物 (3)



27



16



33

出土遗物 (4)

## 報告書抄録

ふりがな	なりゆうまんじょうあと						
書名	龍満城跡						
調査名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	森 格也・向井敏伸						
編集機関	香川町教育委員会						
所在地	〒761-1795 香川県香川郡香川町大字川東上1865番地13 TEL 087 (879) 0231						
発行機関	香川町教育委員会						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。 。	東經 。 。	調査期間	調査面積	調査原因
龍満城跡	香川県香川郡 香川町 大字川東下 字西立満 1442番地	37362	34度 14分 52秒	134度 1分 37秒	1999.11.8 ~ 1999.12.22	57.6m <sup>2</sup>	水路改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
龍満城跡	城館	中世~近世	石垣 土塁	瓦 陶磁器			

# 龍 滿 城 跡

2000年3月31日

編  
発  
行

香川町教育委員会

〒761-1795 香川県香川郡香川町大字川東上1865番地13

電話 087-879-0231

印 刷 株式会社 美 巧 社